特 別 寄 稿

新疆ウイグル自治区におけるウイグル語と漢語の言語接触について

——2010 年における調査の紹介を中心に——

希日娜依・買蘇提
（シェリンアイ・マソティ）

1. はじめに
2. 資料と研究方法
（1）調査方法
（2）調査対象
3. 結果と分析
（1）言語に対する態度
（2）言語の使用
4. おわりに

1. はじめに

新疆ウイグル自治区は、中国国内において、言語間の接触が最も頻繁な地域である。言語間の接触は自治区内にとって、一般的な社会的言語現象となっている。多種類の言語の存在と、多民族社会の人々の広汎な交流は、言語間の接触に良好な「空間」を与えた。こうして、ウイグル語と漢語の接触はこの地域の人々の生活における言語活動の、重要な構成要素となっている。

新疆におけるウイグル語と漢語という言語間の接触に関する重要な先行研究の一つは、徐思益［1997］である。徐思益は個人、家庭へのインタビュー調査、座談会、口頭語の録音による記録、質問紙調査といった方法を利用し、カシュガル、アルタイおよびウルムチという三つの地域におけるウイグル族とカザフ族の漢語の使用状況について、調査を行った。だが、

徐思益の研究対象は主に、言語そのものの研究を基礎としつつ、内在的な視点から言語の発展変化という現象を研究するものであり、社会変数からの言語接触に関する分析が乏しかった。

また、朱学佳［2007］は社会言語学と応用言語学の理論を通じて、ウイグル族の漢語使用状況を言語文化接触の結果と見なし、そこから出発して、質問紙調査の方法を用いて、社会言語学の視点からウルムチ市のウイグル族の漢語使用における変化を考察した。艾尔肯・哈的尔（エルキン・カーディル）の研究（2006-2010）は、「中国国家社会科学西北項目」の研究課題である「新疆維漢語語言接触的社会語言学研究」（新疆におけるウイグル語・漢語の言語接触に関する社会言語学的研究）によって、ウイグル語と漢語の言語接触のウイグル語口語に対する影響を主要な研究対象とし、ウイグル語口語の中における漢語の要素について重点的に分析した。

このような研究の成果とその限界を踏まえつつ、論者は、2008 年から 2011 年までの間、「中国国家社会科学基金西部項目」の研究課題である「新疆維漢語語言接触的社会変量分析」のメンバーとして研究に従事した。そこでは、ウイグル語と漢語の言語接触を調査研究対象とし、社会言語学、社会学、教育社会学の理論と方法を用いて、ウイグル族と漢族の相互の言語に対する認識、態度、学習および認識上の差異について検討した。さらに、このような認識上の差異が、バイリンガル教育と言語学習の理論と実践に対してもつ意味についても考察した。本稿においては、本研究により新疆各地で実施された調査について紹介するとともに、その結果から窺われるウイグル語と漢語の言語接触の様相の一端について述べたい。

2. 資料と研究方法

(1) 調査方法

本研究は、社会学的質問紙調査、社会言語学的視点からの言語使用に関する多変量解析、教育社会学的な言語コミュニティー内の調査やインタビュー調査などの方法を利用した。

①質問紙調査

まず、調査データの有効性と信頼性を確保するために、調査チームは、2008 年 7 月に予備調査を実施し、2010 年 7 月の本調査のために着実な準備を行った。本調査では、同じ内

容のウイグル語（ウイグル族向け）、漢語（漢族向け）、および漢語（ウイグル族「民考漢」[1]向け）の 3 種類の質問紙調査票を用意した。質問紙は、選択肢に答えるという形式であり、一つの質問に対する回答欄は、三つから六つの選択肢からなっている。質問紙の質問項目は 56 個ある。全体は二つの部分に分かれており、第一部分は、調査対象の属性（性別、年齢、職業、学歴）であり、第 2 部分は 56 項目からなる選択式の質問紙調査票である。

新疆は広大な地域であり、内部の地方ごとの人口分布には大きなばらつきがあり、民族構成が複雑であるため、地方により経済や社会、文化の発展の程度が不均衡である。そこで、ウルムチ、グルジャ、カシュガル、およびホータンという四つの都市を調査地として選んだ。配布された質問紙調査票は合計で 3,000 部、そのうち回収された質問紙調査票は 2,118 部であり、回収率は 70.6%に達する。

②インタビューと参与観察

われわれ調査チームのメンバーは、各地域の職業、教育程度、年齢、性別を区別し、言語接触の中に身を置いているウイグル族や漢族にインタビュー調査を行い、言語接触に関わる一次資料を取得することができた。インタビューを行った人数は、60 人余りである。実地調査の過程で注意深く観察を行うことを通じて、信頼の置ける貴重なデータを蓄積できた。

③事例研究

ここでの事例研究は、主に「民考漢」の言語接触に関わる研究を指している。「民考漢」のウイグル族は、漢族と漢語で会話する際、言語上の問題は一切ない。自民族内で会話する際には、母語と漢語を混合して話す場合が多いが、母語のみもしくは漢語のみで話をする人もいる。総じて、「民考漢」の大多数は、その漢語の水準・能力が自民族の母語よりも高い［希

(1) 新疆では、初等教育の授業で使用する言語によって、基礎教育段階の学校を 3 種類に分類してきた。第一は「民族学校」、第二は「漢族学校」、そして第三は「民漢合校」という名称である。原則として、小学校の段階から各民族を児童・生徒とし、それぞれの民族言語を教授言語とする学校のことを「民族学校」と称する。その大部分でウイグル語による教育が行われてきた。ウイグル語のほか四つの言語、すなわちカザフ語、モンゴル語、シボ語、キルギス語を教授言語とする「民族学校」もある。「漢族学校」とは中国語の標準語（普通話）を授業用言語として用いる学校のことを指す。漢族の子供たちは通常、このような学校に通う。「民漢合校」とは、同じ学校内に、ウイグル語を授業使用言語として使用する「民族クラス」と、漢語を授業用言語として使用する「漢族クラス」を併設する学校のことを指す。2004 年から、新疆では基礎教育段階の学校はほとんどが「民漢合校」となった。一般的に、少数民族の子供たちは皆「民族学校」に通い、漢族の子供たちは皆「漢族学校」に通っている。一方で、一部に、「漢族学校」に通う少数民族の子供もいる。幼少期から漢族学校で勉強し、高校卒業後に漢語の大学入学試験を受験する少数民族の受験生（およびそのような経緯で大学に入った大学生および卒業生）は、「民考漢」と呼ばれている。対照的に、「民考民」とは、小学校から「民族学校」に通い、高校卒業後に民族言語の大学入試を受ける受験生のことを指す。

日娜依・買蘇提、大谷順子 2011: 288]。そこで、ウルムチ市とカシュガル市の一部の「民考漢」について調査研究を進めることを通じて、実際に用いられているウイグル語・漢語の間の言語接触の状況について分析を行う。新疆におけるウイグル族の「民考漢」は、ウイグル語と漢語の言語接触の中心的な存在であると言えよう。

④データ統計

本研究のデータにおける統計の処理には、SAS9.2 ソフトを利用し、データに対する分析を行った。

1）四つの地域の 2 種類の質問紙調査票（ウイグル語、ウイグル族向け；漢語、漢族向け）について、統計分析を行った。

2) ウルムチ市とカシュガル市の質問紙調査票の中で、「民考漢」について統計分析を行った。

3）性別（男、女）、年齢（五つの年齢層）、職業（7 種類の職業）、学歴（8 段階）という変数を通じて、56 個の問題について統計分析を行った。

本調査において、方法論の側面から見ると、質問紙の策定、実施およびデータ統計は、ある程度の代表性、有効性、および信頼性を持っている。参与観察とインタビュー調査は、質問紙の策定やその後の調査活動の大きな助けとなり、本報告の学術的な価値を高める上で有効なデータを提供するものであった。

(2）調査対象

本調査研究では、新疆ウイグル自治区の南疆と北疆という二つの地域に、それぞれ二つの調査実施地を設定した。すなわち、北疆のウルムチ市とグルジャ市であり、南疆のカシュガル市とホータン市である。配布された 3,000 部の質問紙調査票のうち、2,118 部が回収された。回収率は 70.6%に達している。調査対象の属性は、以下のようになる。

①性別

男性は 889 人で全体の 41.97%を占め、女性は 1,229 人で 58.03%を占める。調査対象の中、女性の比率が男性より高い。

表 1　調査対象の性別

性別	人数	%
男性	889	41.97
女性	1229	58.03

②年齢

18歳から29歳の間の人が1,080人、30歳代の人が569人、40歳代の人が370人、50歳代86人、60歳以上が13人である。対象年齢は、18歳から40代までに集中している。すなわち、青年と中年である。

表2　調査対象の年齢（単位：人）

年齢	18 － 29 歳	30 － 39 歳	40 － 49 歳	50 － 59 歳	60 歳以上
人数	1080	569	370	86	13
%	50.99	26.86	17.47	4.06	0.61

③職業

職業については、公務員が200人で9.44％を占め、専門職が230人で10.86％、教師が395人で18.65％、学生が639人で30.17％、工場労働者が210人で9.92％、商人が135人で6.37％、その他が309人で14.59％を占める。以上を見ると、調査対象の職業分布は多様であり、このことにより結果の代表性も比較的高いものとなると考えられる。

表3　調査対象の職業（単位：人）

職業	公務員	専門技術者	教師	学生	工場労働者	商人	その他
人数	200	230	395	639	210	135	309
%	9.44	10.86	18.65	30.17	9.92	6.37	14.59

④学歴

学歴をみてみると、教育を受けていない人が10人で0.47%を占め、小学校卒業者が35人で1.65％、中学卒業者が115人で5.43％、高校卒業者が373人で17.6％、中等専業学校卒業者が173人で8.17％、高等専業学校卒業者が638人で30.12％、大学卒業者が727人で34.32％、修士課程修了者が47人で2.22％をそれぞれ占める。高等専業学校以上の学歴を持つ調査対象は1,412人であり、66.67%を占める。全体として、比較的学歴が高いという特徴がある。

表4　調査対象の学歴（単位：人）

学歴	教育を受けていない	小学校	中学校	高校	中等専業学校	高等専業学校	大学	大学院及び以上
人数	10	35	115	373	173	638	727	47
%	0.47	1.65	5.43	17.61	8.17	30.12	34.32	2.22

その中で、大学以上の学歴を持つ人は36.54%を占めているが、中学卒業者はわずか5.43%を占めるにすぎない。また、職業構成を見ると、教師、学生、専門職・他の部分は74.27％を占めている。調査対象は、総体的に学歴と職種のレベルが高く、判断力と分析力

を持つという点があるため、そこに反映された情況には一定の代表性があると考えられる。

3. 結果と分析

(1) 言語に対する態度

張偉は「言語に対する態度は、個人のある種の言語に対する価値評価と行為の傾向を示すものであり、認識、感情、および意向という三つの成分を持っている。認識成分は、ある種の言語に対する認識および理解、賛成もしくは反対を示す。感情成分は言語に対する感情を示す。例えば好き嫌い、尊重と差別などである。意向成分は、その言語に対する行為の傾向である。」と指摘している［張偉 1988: 56］。それでは、ウイグル族と漢族は、ウイグル語と漢語にどのような態度を持っているだろうか。

①民族と言語認識

表 5　　ウイグル族と漢族のウイグル語と漢語に対する認識（単位：%）

	ウイグル語		漢語		ウイグル語と漢語		外国語		その他	
	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族
大衆言語は何か	63	9.4	11.9	80.7	20.5	6	2.3	1.7	2.3	2.2
使用価値の高い言語	45.2	9.3	15.4	71.5	30.8	8.4	5.5	7.4	3.1	3.5
身分を表すことができる言語	53.3	9.3	11.2	64	26.8	11.8	5.2	8.3	3.5	6.6

第一に、ウイグル族と漢族は、自民族言語に対して支持する態度を持つ。大多数の漢族は、漢語が大衆言語であると考える。だがウイグル族は、この意見とは異なり、ウイグル語を大衆言語と考える人が 60%を超えている。新疆においては、国家の通用言語である漢語と民族地域の通用言語であるウイグル語が同時に推進されており、これら二つの言語の地位と社会的機能には差異が存在している。しかし、漢族もウイグル族も自民族言語を大衆言語として希望しており、二つの民族言語に対して強い民族感情を持っている。

第二に、使用価値の高い言語に対する認識において、30.8% のウイグル族はウイグル語・漢語両言語の使用価値が高いと認識しているのに対し、15.4%のウイグル族は漢語の使用価

値が高いと認識しており、前者の比率が後者より高い。このことは、新疆においては両言語がともに一定の使用価値をもち､相応の人々の認識となりうることを説明している。しかし、注目に値するのは、ウイグル語と漢語という両言語のアイデンティティにおいて、ウイグル族と漢族には明らかな差異があることである。

第三に、53.3%のウイグル族はウイグル語が自分の身分を表すことができると考え、ウイグル語と漢語の両言語がともに身分を示すと見なしているウイグル族は、漢族より明らかに多い。38.6%の人（漢族とウイグル族）は、ウイグル語と漢語の両言語が自身の社会的身分の位置付けを表すことができると考えている。

②民族と言語学習

表 6　ウイグル族と漢族の言語学習に対する見方 1（単位：%）

答え／問題	ウイグル語		漢語		ウイグル語と漢語		外国語		その他	
	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族
貴方が勉強したい言語は	29.4	14.6	11.9	39.3	27.7	12.2	23.4	25.7	7.6	8.2
現在の広く流行する言語	15.8	6.3	14.8	55.9	33.6	13.8	29.7	18.2	6.1	5.8

表 7　ウイグル族と漢族の言語学習に対する見方 2（単位：%）

問い／答え	漢語を修得すれば就職にどんな影響があるか		ウイグル語を勉強することは就職にどんな影響があるか	
非常に有利	ウイグル族	63.5	ウイグル族	44.7
	漢族	57.6	漢族	26.8
少し有利	ウイグル族	23.9	ウイグル族	32.9
	漢族	25.6	漢族	34.3
どちらでもない	ウイグル族	8.7	ウイグル族	16.5
	漢族	13	漢族	32.6
少し不利	ウイグル族	0.5	ウイグル族	3
	漢族	1	漢族	2.1
非常に不利	ウイグル族	1	ウイグル族	1.3
	漢族	0.7	漢族	0.5

その他	ウイグル族	2.4	ウイグル族	1.6
	漢族	2.2	漢族	3.7

第一に、ウイグル族と漢族には、お互いの言語を学習する際の態度に大きな差異がある。ウイグル族においては、二つの言語とも勉強したい人が 39.6%を占め、漢族の中で二つの言語とも勉強したい人は 26.8%を占める。半分程度のウイグル族は、現在広く使用されている言語を漢語とウイグル語の両言語と考えているが、74.1%の漢族は現在広く使用されている言語を漢語と外国語と考えている。

第二に、漢語を修得すれば就職に有利になると考えるウイグル族は、漢族より多く、87.4%を占めている。ウイグル語を修得すれば就職に有利であると考えるウイグル族は漢族より多く、それぞれ 77.6%と 61.1%を占めている。新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル教育の推進にともない、大多数のウイグル族は漢語を修得することが必要であると考えている。ウイグル語を勉強することが就職に有利であると考える漢族も少なくない。

(2) 言語の使用

表 8　ウイグル族と漢族の常用言語（単位：%）

ウイグル語		漢語		ウイグル語と漢語		その他	
ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族
75.4	8.1	3.1	83.6	19.7	8.1	1.8	0.2

本調査の結果を見ると、大多数のウイグル族と漢族の常用言語は、やはり自身の母語である。だが、ウイグル族の中には、自身の母語以外にウイグル語と漢語を常に混ぜて使用する人が漢族より明らかに多く、11.6%多い。漢族の中で常にウイグル語を使用する 8.1% の人々は、すべてカシュガル市とホータン市に集中している。このことはこれらの地方の実際的な状況と関係がある。ホータンはウイグル族を中心とする多民族居住地域であり、2008 年年末に、全地域人口総数 1,910,054 人のうち、ウイグル族は 1,838,945 人、総人口の 96.53%を占める。漢族は 67,057 人、総人口の 3.25%を占める。したがって、南疆のホータンとカシュガルなどの地域において漢族がウイグル語を話すのは、比較的よく見られることなのである。

表 9　ウイグル族と漢族が場所によって常用する言語（単位：%）

言語／場所	ウイグル語		漢語		ウイグル語と漢語		その他	
	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族	ウイグル族	漢族
学校	65	10	10.8	83.8	22.3	5.1	1.9	1.1
仕事場	50.4	6.8	17.3	81.1	27.7	9.6	4.6	2.5
政府機関	26.8	2.1	37.6	85.8	33.4	10.4	2.2	1.7
銀行	26.6	3.2	43.8	89.4	28.3	6.9	1.3	0.5
劇場	64.7	6.2	15.1	88.3	16.2	5.2	4	0.3
レストラン	79.3	9.2	3.1	79.3	16.5	11.3	1.1	0.2
商店あるいはバザール	39	7.4	10.9	73.4	47.8	18.4	2.3	0.8

本調査の結果によると、ウイグル族と漢族により学校と仕事場において通常使用される言語が漢語であることがわかる。家庭内以外の場において漢語の使用率は相当に高い。二つの言語を合せて使うウイグル族は、明らかに漢族より多く、相対的にウイグル語の使用率は低い。結局のところ漢語は中国の通用言語であるため、以上の結果になることは必然性を持つとも考えられる。政府機関や銀行などの公的な場において、ウイグル族の言語選択には非公式な消費の場と明らかな差異が見られる。すなわち、公的な場においては漢語の使用率が非常に高い。逆に、非公式な場においては、漢語の使用率はウイグル語・漢語の混用ないしはウイグル語と比べ明らかに低くなる。

こうして見ると、家庭以外の環境において、ウイグル族の言語の使用習慣には二つの状況が見られる。公的な場では、漢語ないしはウイグル語・漢語の両言語を使うのが一般的である。逆に、非公式の場では、ウイグル語だけを使用するか、もしくはウイグル語と漢語を混用するバイリンガル現象がとくに顕著である。漢族は、公的な場でも非公式の場でも、漢語を使う割合が相当に高い。ウイグル語を使用する人、ないしはウイグル語と漢語を使用するバイリンガルの人は一部分にすぎず、彼らはおもにカシュガル市とホータン市に集中しており、グルジャ市がそれに次ぐが、ウルムチ市にはそういった人はほとんどいない。2009 年の統計によると、ウルムチの漢族は 1,749,351 人で市人口全体の 73%を占め、ウイグル族は 309,853 人で 13%を占める。このような言語使用情況は、明らかに各地域の人口分布と一定の関係がある。

以上のデータから見ると、新疆における社会環境の下で、ウイグル族がどの言語を選択し

てコミュニケーションをとるかは、その対象や場所と直接的な関係をもつ。比較的緩やかな環境の下では、例えば学校、レストラン、劇場などの場所では、ウイグル族は母語を使うことを望む。いくらかの公的な場所、例えば政府機関、銀行などの場所では、話相手となる対象と場所の特殊性による制約を受け、ウイグル族は漢語、もしくは漢語・ウイグル語のバイリンガルを選択する傾向が強い。

4. おわりに

本調査研究を通じて、ウイグル族と漢族においては、ウイグル語と漢語に対する認識の上で顕著な差異が存在することがわかった。ウイグル族と漢族はお互いの言語を学習する態度の上でも、大きな差が存在している。大多数のウイグル族は、漢語をマスターする必要があると考えている。漢族も、ウイグル語を修得すると就職に有利であると見なす人が少なくない。大多数のウイグル族と漢族が常用している言語は自身の母語であるが、ウイグル族の使用言語の選択は、話す相手および場所と比較的密接な関係をもっている。

この課題を研究する中で、言語間の接触に関する分析研究には非常に複雑な面があると痛感させられた。さらに、研究過程全体の中に、様々な不足点や問題点が存在している。今後の研究においては、豊富な参与観察を行い、言語間の接触における社会変数を確定し、一つ一つの変数に対してミクロな視点から追跡調査を行う必要がある。その上で、理論面の検討も重視して研究を深化させ、修正のプロセスの中で不断に研究成果を完全なものにするように力を尽くしたいと思う。

参考文献

＜中国語＞

愛徳華、薩丕爾 1985（陸卓元訳）『語言論』北京：商務印書館。

陳保亜 1996『論語言接触与語言連盟』語文出版社。

丁文楼 2002『中国少数民族双語教学研究与実践』北京：民族出版社。

菲爾徳 1985『語言論』北京：商務印書館。

風笑天 2010『社会学研究方法』北京：中国人民大学出版社。

陳原 2000『社会語言学』北京：商務印書館。

和田市地方志編纂委員会 2002『和田市志』烏魯木斉：新疆人民出版社。
厲声 2006『中国新疆歴史与現状』烏魯木斉：新疆人民出版社。
馬戎 2002『社会学的応用研究』北京：華夏出版社。
瀋陽、馮勝利 2008『当代語言学理論和漢語研究』北京：商務印書館。
徐大明 2007『中国社会語言学新視角』南京：南京大学出版社。
徐大明 2007『社会語言学研究』上海：上海人民出版社。
徐思益等 1997『語言的接触与影響』烏魯木斉：新疆人民出版社。
万明鋼 1997「論民族教育研究中的双語問題」『教育研究』1997 年第 6 期、56–63 頁。
烏魯木斉統計局 2010『烏魯木斉統計年鑑 2010』北京：中国統計出版社。
新疆教育年鑑編纂委員会 1991『新疆教育年鑑 1949-1989』烏魯木斉：新疆教育出版社。
袁焱 2001『語言接触与語言演変』北京：民族出版社。
張偉 1988「論双語人的語言態度及其影響」『民族語文』1988 年第 1 期、77–80 頁。
朱学佳 2007『維吾爾族漢語使用変異研究』北京：中央民族大学出版社。

＜日本語＞
リズワン・アブリミティ 2010「中華人民共和国成立後の新疆における「民族学校」の漢語教育をめぐる一考察」『アジア・アフリカ言語文化研究』78 号、44–77 頁。
J. W. クレスウェル、V. L. プラノクラーク 2010（大谷順子訳）『人間科学のための混合研究法』北大路書房。
希日娜依・買蘇提、大谷順子 2011「新疆ウイグル自治区の特有群体「民考漢」―ウルムチ市のウイグル人を事例として―」日本愛知大学現代中国学会編『中国 21』vol. 34、281–302 頁。

【付記】本稿は、NIHU イスラーム地域研究東京大学拠点主催の中央ユーラシア研究会特別講演会（2013 年 1 月 21 日、東京大学本郷キャンパス）における講演内容をもとにまとめたものである。

（新疆師範大学言語学院・副教授）